

---

# 誕生日の夜

魚住すくも

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

誕生日の夜

### 【著者名】

魚住すくも

### 【あらすじ】

朝起きてみると、ケータイのメール。私はそれを目にし、あっかんべーをした……何気ないけれど、特別な一日を描いた作品です。

ケイタイの着メロで目が覚めた。見ると、メールだ。

『誕生日おめでとう。父より』

私はそれを見てあっかんべえをした。

(何せ、しりじらしこ)

父さんと母さんは一年前に離婚した。父さんの浮気が原因だった。今は、母さんと一人でアパートを借りて暮らしている。

時計を見る。

「やつべえ、遅刻だ……」私は、つぶやくと急いでリビングに行つた。

母さんは、もつ仕事にこいつたようだ。キッチン兼用のリビングは、死んだようにしずまりかえっていた。きっと今日も帰りは遅いにちがいない。私の誕生日のこと、覚えているだろうか。

私は、仕度をすませると、高校に向かつた。

西口が文庫本にさつとさせじこんできた。

「あや、何してんの?」

「きなりの声にびっくりして」と、後ろに由利が立っていた。

「うわ、びっくりした。何って、本、読んだるの」

「ふうん。一緒に帰る」

由利は、幼なじみといつやつで、家も近い。高校も、何となく一緒になつたので、けつこう一緒に帰ることが多い。

「私さあ、今日、誕生日なんだあ」わざと、ブリッ子っぽく囁つてみる。

「だから、何かちょうどいい」由利の前に右手を出す。

「あんな。何で私が、あんたにプレゼントしなくちゃいけないのよため息をついて、

べしっと私の手をたたいた。

「何よ、いけずう」

そう言つて、私は由利の後を追つていった。

「あ、待つて、コンビニ寄つていい?」私はそう言つて店内に入つていつた。インスタント食品のたなに直行する。

私は、流行つてカップめんを手にとつた。

「ちょっと、何よそれ」

「夕食。母さん今日、遅いから」私が言ひ。

「ふうん。大変だねえ」と、軽く言う由利。

私たちは、それを買つと、コンビニをあとにした。

二人は、しばらく無言でゐるといつた。

「じゃあね」

白いこじんまりとしたアパートの前で、私は言つた。  
もう、空は、暗くなりはじめていた。階段をのぼる。

家に入ると、さつそく着がえて、夕食の準備にとりかかつた。

白っぽい電灯の中、私のヌードルをする音だけがこだました。  
食べ終わると、何もすることがなくなつて、私はラジオを聞いていた。

一時間が過ぎ、一時間が過ぎた。私の時計の時計は、もう八時を過ぎていた。

いくら何でも遅すぎる。私は、ラジオのスイッチを切つて自室を出た。もう、母さんも帰つてきていいはずなのに。

不安が胸からあふれだす寸前、チャイムが鳴つた。

「やつほ」

私は玄関で立ちつくした。由利だ。後ろの方には、母さんがいた。「シチューあまつたから……」と、由利は言つた。そして、母さんにめくばせをした。

「んで、会社帰りに由利ちゃんと会つたからケーキを買いに行つた」

そう言つて一人は、シチューの入つたタッパーと、白くて大きなケーキの箱をさしだした。

おわり

(後書き)

大学の時にとある公募に出しあつとして、結局出さなかつた作品です。ダメ元でも、出しときやよかつたとあとから思つてみたり。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7204e/>

---

誕生日の夜

2010年12月4日05時43分発行